2020 July
274号
7月
はあもにい
●医療法人創和会広報誌はぁもにい / 発行 医療法人創和会 理事長 重井文博
令和2年7月1日発行

研究助成受賞しました！！

重井医学研究所　分子遺伝部門　古家野 孝行

山陽放送学術文化財団 第57回（令和元年度）学術研究助成学術奨励賞を受賞しました。研究課題は「モデル生物を利用した遺伝性腎疾患の分子制御基盤の解明」です。久しぶりの研究助成受賞で、個人的には“ほっと”しています。色々な方々から「おめでとう」と言っていただき、素直にうれしいです。

今年で入職５年目になりますが、４回目の応募で受賞することができました。入職した時にまず目標としたのが、この山陽放送の研究助成受賞とフルマラソンのサブ４（４時間以内で完走）でした。マラソンは、２回目の挑戦ですんなりクリアしたのですが、この研究助成はなかなか取れず…。簡単に受賞できるかなと思っていたのですが、現実はそんなに甘くはなかったです。ただ、落ち続けて言うのもなんですが、今回は少し自信がありました。というのも、研究課題をこれまでとは大きく変更し、ずっと考えていた内容を‘満を持して’申請していたからです。

これまでは、昨夏に論文にもまとめましたが、腎線維化についての研究を行なっていました。新たに、常染色体優性多発性嚢胞腎（ADPKD）について研究を進めていこうと思っています。ADPKDは家族遺伝性の腎疾患ですが、非常に発症率が高いです。原因遺伝子は20年以上前に見つかっています。近年、治療薬も承認されて使用されています。しかし、その基本的なことは実はよくわかっていません。この研究ではADPKDの原因遺伝子PKD２の細胞や腎臓での働きを徹底的に調べることを目的にしました。

どうやって調べるかですが、まずは酵母を使って調べます。酵母って、お酒やパンやみそなど美味しいものを作るために使われるだけではありません。研究にも使えます！実際に酵母研究が基になったノーベル賞はたくさんあります。ものすごく簡単に言うと、酵母も人間も生物学的には変わりません。私は酵母をモデルにしてずっと研究をしてきたので、その経験を基に腎臓の研究に新風を起こせたらと思っています。もちろん、酵母だけで研究するのではなく、研究所の強みである、モノクローナル抗体作製技術やゲノム編集技術も駆使しながら研究を展開する予定です。詳しいことは書ききれないので、興味がある方は問い合わせてください。

ちなみに、授賞式と懇談会が行なわれるはずでしたが、今年は中止。（おそらく皆さんが気になっているであろう）写真の立派な目録に中身は入っていません！（笑）今後ふり返られることの多いこの年に、研究助成を受賞できたのも、何かの運命かなと思っています。

この人紹介 !!

田中 義人先生をご紹介します！
４月からしげい病院に勤務されています。

Q. 今までどのような医療をされてきたのですか？

大学卒業後、ずっと神経内科医として勉強してきました。関連病院には急性期病院と慢性期病院があり、どちらも経験させていただきましたが、慢性期病院で初めて気づくこともたくさんありました。神経内科は治療法がない疾患の患者さんをフォローすることが多いのですが、急性期病院でできることがなくなると慢性期病院に紹介されてきます。そのような患者さんから「いい治療はないですか？」「新しい薬はできましたか？」と尋ねられることが多く、その度に「あとはリハビリしかありません」と答えていました。

しかし実際にどのようなリハビリを行なっているのか、どのような効果があるのか全く知らないまま話をしていることに疑問を感じるようになりました。それがリハビリを勉強しようと思ったきっかけです。岡山大学でリハビリをしている先生に相談したところ、川崎医科大学のリハビリ科で勉強することを勧められ、２年間大学の研修医として勉強させていただきました。

それからは神経内科とリハビリ科両方の専門性を生かして、患者さんやご家族のお役に立てればと思いながら診療しています。

Q. 休日の過ごし方を教えてください。

子供たちとそうじゃ吉備路マラソンのファンランに参加しようと思ったことがきっかけで、ジョギングをするようになりました。結局、ファンランは子供が出てくれず妻と二人で参加しましたが、その後もコツコツ走っています。休みの日は、朝５時頃からできるだけ 10 ～ 15 ㎞走るようにしています。走った後は妙な達成感があるので、ダラダラと過ごすことが多いです。

プロ野球観戦が好きなので、以前は隙あらば週末に広島や甲子園に出かけていました。最近はチケットがとりにくいのとお金がかかるので、テレビ観戦が主体になっています。コロナウイルスの影響で開幕が遅れているので、早く収束してくれればと思っています。

Q. 最後に、しげい病院での抱負について教えてください。

今は自分に何ができるのか、何をすべきかがはっきりわからない状態です。回復期リハビリ病棟にも一般・療養病棟にも神経疾患でリハビリを必要としている患者さんが入院されますので、まずはそのような患者さんのお役に立てればと思います。

病院のことがわかってくると、今以上によくできそうなことや自分のやりたいことがみえてくると思いますので、その時には皆さんにご協力いただきながら病院の発展に貢献できればと思います。

（インタビュアー・榊原）

医療従事者情報サイト「m3.com」の取材を受けました

研究所附属病院の真鍋　康二院長が、エムスリー株式会社が運営する会員制医療従事者向け情報サイト「m3.com」の取材依頼を受け、インタビューに応えました。

「m3.com」はインターネットを活用した医療関連事業を行なうために、ソニーネットワークコミュニケーションズ（通称 So-net）の出資により設立された医療情報ポータルサイトです。去年はあの LINE アプリの LINE と協業して、LINE ヘルスケアを立ち上げ話題になりました。国内医療 IT では圧倒的 No.1 の企業で、2017 年には米 Forbes の「世界で最も革新的な成長企業」でも５位に選出された、すごい企業からの取材でした。インタビューは３回にわたり連載されており、内容は下記のようになっています。

Vol.1 では、倉敷市に開院した創和会 しげい病院が、1968 年に県内で最初に始めた人工透析のルーツ。そして、現在では創和会の２つの病院で県内の患者さんの 15%が透析療法を受けていること、透析導入疾患の変化、研究所附属病院の透析治療の実情。

Vo2. では、地域の中規模な病院として、高度急性期病院からの回復期の患者さんや地域の開業医や医療機関からリハビリの必要な患者さんなどを受け入れ、在宅療養や施設での療養につなげる厚生労働省が進める地域包括ケアシステムの中核病院としての研究所附属病院の役割。

Vol.3 では、地域密着型病院の役割としての小児療育センターの成り立ち、研究所附属病院の周術期管理センターの在り方。

会員制なので登録をしないと読めませんが、興味のある方は「m３　重井医学研究所附属病院」でインターネット検索してぜひ登録して読んでみてくださいね。（井上）

図書室がリニューアルされました！

しげい病院　本館２階手術室前の中央図書室がリニューアルされていますが、皆さんご存じでしょうか？

しげい病院の図書室は、この規模の病院の図書室としては非常に充実しており、海外の専門誌も定期購読しています。これまで購読してきた書誌も多数所蔵しています。2019 年度は病院全体で図書費に 260 万円以上も費やしています。

このように充実した蔵書を持つしげい病院の図書室ですが、場所が医局近くにあるせいか利用する職員は少なく、有効に活用されているとは言いがたい状況でした。利用する際も移動棚のせいで閲覧スペースが暗く狭くなり、閲覧しにくい状態でした。

そこでより多くの職員に利用してもらうために、図書室のリニューアルを行ないました。

最近はほとんどの文献が PDF で入手可能になっていることから、既存の蔵書を大幅に整理することで移動棚を撤去し、広いスペースに雑誌を見やすく配置しました。

必要に応じてすぐコピーやネット検索できるように、インターネットパソコン２台とプリンター複合機を設置。文献検索や研修会の資料作成などに役立ててもらえればと思います。作業スペースはより多人数で利用できるように、机といすを新しく購入しています。

皆さんの積極的な利用をお待ちしています。

（松田）

重井医学研究所附属病院

急成長に導いたリーダーたち

重井医学研究所附属病院　名誉院長　瀧　正史

開院の日

平成 30 年間の歩み

私が創和会重井医学研究所附属病院（以下、研究所附属病院と略す）で勤務開始したのは、1989 年 3 月 16 日であるが、今日までの過去 30 年間を振り返りその足跡を辿ってみた。赴任当初の研究所附属病院は、前年にベッド数 200 床に増床されるとともに第二透析室が増築され、さらに新 3 階病棟が肝臓病センターとしてオープンしたばかりであった。また、同年に創和会の 30 周年記念祝賀会が日野原重明先生を特別講師として招き開催された。そして、1989 年 11 月には、研究所附属病院の創立 10 周年式典が執り行われ 10 年史が作成された。開院後の 10 年間は、病院としての基盤固めの時期であり、初代院長木下康民先生が 1982 年 8 月に逝去されるという不幸があったが、その後、2 代目院長に小坂淳夫先生を 1985 年 4 月にお迎えしてからは、スピード感を持って病院が発展していくこととなった。

1988 年 4 月には、腎臓病センターを看板とした施設を特徴づけるものとして、超音波下で腎臓を確認しながら機械的にリアルタイムに腎標本を採取できる Biopty-Gun による腎生検法が、全国で最も早く導入された。これは、岡山大学泌尿器科の公文裕巳先生（後に教授）の推奨によるものであった。以来、腎生検に対するストレスは軽減され、若手医師でも実施可能となったことは画期的なことであった。1989 年 4 月には小児末期腎不全患者に対して、在宅自己腹膜透析治療の承認を得て、10 人近い小児の患者さんの治療に適用された。

1991 年 5 月には看護婦のユニフォームが変更され、白色からカラフルな制服へとなった。

1993 年 3 月に、大森晶彦医師が第 3 代院長に就任され、5 月には増築していた第二透析室が稼働することになり、透析患者を余裕を持って受入れる体制ができ上がったのである。

1997 年 3 月には、、大森浩之医師が第 4 代目院長に就任され、1998 年 1 月に訪問看護ステーションの開設、5 月に第二透析室の増床（97 から 110 床）、7 月には 5 階病棟を療養型病床群に転換、11 月には外科外来診療開始、12 月に新職員食堂増築工事完成、11 年 4 月に臨床検査システム稼働、5 月に 1 階フロアの改装（内視鏡室、緊急検査室等）、6 階病棟完成（32 床）、6 月に 2 階、各病棟改修および清掃を行うなど、矢継ぎ早にハード面での充実・拡大を図り、創立 20 周年を迎えたのである。この時、近隣の診療所の先生方をお招きし、新職員食堂で盛大に祝賀会が開催されたのである。同時に記念誌を発行するなど慌ただしい 2 年間であった。その

開院 20 周年祝賀会

後も、2000年4月には新立体駐車場を使用開始して、駐車スペースの拡充を図った。同年7月に、当院の開院以来看護部を支えリードしてきた徳永千鶴子看護部長が退職されることになり、永年の功績と労を労って、送別会が現在の職員食堂で開かれ別れを惜しんだ。

2001年10月に外来食堂、多目的ルーム、リネン室を完成し施設の内容充実を図るなど開院後20年間で、ハード面での第一段階の改修・改築工事を終えたのである。

2002年2月には、ソフト面での改革を実施すべく、職員一丸となって準備してきた日本病院機能評価機構の審査を受け認定証を取得できた。この取得に当たっては足掛け2年間かけて定期的に会議を開き、多方面かつ詳細にわたる病院運営・事故防止、院内感染対策等々20種にもおよぶ委員会の設置・診療手引書等を作成し、病院として一人前の組織を構築することができたのである。

2003年4月から職員下足箱を廃止し院内での下足着用が認められた。12月には、社会的ニーズの高まりに応えるため、小児療育・リハビリ・病棟等の増築工事を行い、2004年3月に、一般病棟154床、療養病棟46床の病床体制となった。

2004年9月に5代目院長に瀧　正史が就任した。2005年7月に病棟内装改修および空調取替工事を完了した。2007年2月には病院機能評価更新審査を受審した。6月には院内保育所「みらくる」を開設し、職員の福利厚生の一助とした。また、名前を改めた血液浄化療法センター

2007年機能評価再受審

の全面的なリニューアルを図った。2008年3月に電子カルテ導入のための初期段階として、オーダリングシステムを稼働開始した。6月には看護基準7対1を取得し、病床数は198床に減じた。そして、同年11月には開院30周年を迎えたのである。

2010年7月に院長交代があり、福島正樹先生が6代目院長に就任され、本格的な腎臓病センターへの飛躍が期待された。

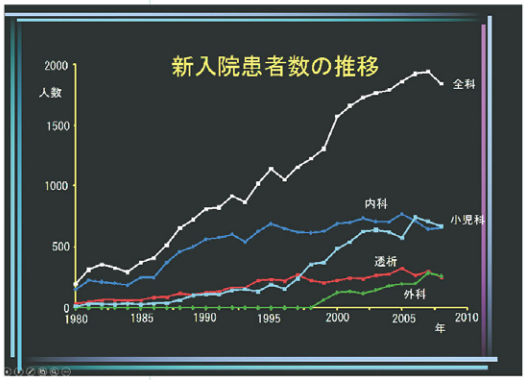
診療業績

開院後の数年間は医師数が十分でないこともあり、外来・入院ともに新患患者数の増加は緩やかな伸びであった。しかし、5年経過してからは、まさに直線的に右肩上がりの患者数の増加がみられ、2010年には新入院患者数は約2,000人近くまでに達した。この患者数の増加には、小坂淳夫院長時代に岡山大学第一内科医局出身の都窪医師会の診療所の先生方が毎週火曜日に院長回診に同伴して患者対応にあたるなど病診連携がうまくスタートできたことが大きな要因であると考えられる。当初の肝臓病センターは、岡山県下では数少ない肝生検が実施できる施設として多くの患者さんの紹介を受けカンファレンスも活発に行われた。肝臓病とともに消化器疾患も専門医の加入とともに患者数も増加の一途をたどった。

一方、透析患者数は、第二透析センターをオープンしてからは着実に増加し、2010年末には血液透析患者320人、腹膜透析患者30人となり、腎代替療法としての血液および腹膜の両透析療法を実施しうる岡山県下最大の透析施設として成長した。

こうした医療を実践していくために最も苦労したのが医師確保であった。外来患者および入院患者が増加すれば、医師数の確保が必須となるのであるが、その頃、中四国の大学の小児科医局ならびに岡山国立病院小児医療センターから20名近い若手医師たちが短期間ではあったが、次々と医療支援を得られ、常に医師規定数を確保することができた。

当院は、研究所附属病院の名前の通り、研究所に附属して設立された病院である。研究所は、代々著名な研究員の方々を輩出しており、沖垣　達先生は国際的にも有名な方であり、糸球体



新入院患者数の推移

上皮細胞の研究では顕著な業績をあげられた。次いで佐渡義一研究員は、モノクローナル抗体作成では極めて優れた技術を開発し、遺伝性腎疾患であるアルポート症候群の診断法を確立した業績は高く評価され、日本腎臓学会から特別表彰を受けたことは特筆に値する。また、基礎研究が臨床研究と相まって成果をあげることができるようになり、このことは後に、中四国地区の若手医師が当院で研修した際に、５名の医師たちに博士号に相当する素晴らしい研究成果をあげることができた。こうした、研究所と病院との連携により当院での研修を希望する医師たちが増加し、彼らのうち４名は、臨床における成人領域の腎疾患症例を研修することで、日本腎臓学会から専門医としての資格が授与されたのである。

分野別診療内容の変遷

内科領域は、1987 年に荒木俊江先生が赴任して以後、近藤淳一医師、重井文博医師（現理事長）、松島 寛医師、真鍋康二医師（現院長）、坪井 壮医師が順次赴任し、肝臓病・消化器病グループの充実した布陣で診療にあたり、患者数は一気に増加へと向かったのである。その後も、岡 優子医師、西山仁樹医師、藤本さおり医師、池田 弘医師、山本直樹医師へと受け継がれ安定した診療分野を確立している。

腎臓分野は、数少ない専門医の中で、有元克彦医師、松原龍也医師に金城沢子医師、手納寿世医師らが、大森浩之医師の指導の元で研修を重ねて貴重な戦力となり、後に２名が腎臓専門医の資格を得ている。慢性糸球体腎炎に対しては、開院当初の頃より、当時の木下院長のもとで、積極的な副腎皮質ホルモン剤ならびに免疫抑制剤の併用治療を早期に導入し、いわゆる攻めの医療を展開することで、その後の長期予後改善に貢献したことは専門病院としての実績を示したものと言えよう。当院の腎臓病センターが目指していたものは、初代院長の木下康民先生の指導のもと、小児から成人に到るまで垣根のないつながりのある腎臓病治療を目指すことであったが、その成果は道半ばではあるが成就されつつあると思われる。2011 年７月に福島正樹先生が院長に着任してからは、成人の腎疾患患者数が年々増加傾向となっている。ただ近年は専門医が不足する状況となっており、腎臓病センターとして今後の課題であると言える。

生活習慣病、中でも糖尿病患者の増加、さらにはこれを基礎疾患とする末期腎不全患者の増加が最も注目される疾患となってきた現在、真鍋康二現院長、荒木俊江医師、大森一慶医師の３人の糖尿病専門医を中心として診療体制を確立し、約 1,000 名の患者を対象に精力的な診療が実施されている。腎症の進行抑制に向けた治療を実施しているが、残念ながら末期腎不全へ陥る患者は少なくない。しかし、その成果は徐々ではあるがみられるようになり、透析導入率および透析導入までの期間を延ばすことができるようになっている。

当病院における患者数および経営上から重要な中心的診療部門の透析領域では、全体の患者数は 2011 年以降は転入・転出・転院・死亡等の関係で一定した増加傾向はみられていない。ただし、これには透析導入の基礎疾患である腎炎性疾患は激減し、糖尿病を起因とした腎症による患者が多数となっていることと、透析患者さんの高齢化と透析年数の長期化も関与していると思われる。近年は透析患者数は岡山県下で最も多いものの、その数は 360 人を境に頭打ちの状態が続いている。血液浄化療法の名称の通り、多方面にわたる血液浄化治療に関与している。例えば、LDL 吸着、エンドトキシン吸着、血漿交換療法等々を行っている他に、透析方法として、在宅透析、長時間夜間透析等の選択も可能となっている。透析部門のリーダーとしての自覚を

生活習慣病チーム

内視鏡チーム

現在の血液浄化療法センター

持って、透析内容、技術ともに最先端の医療が提供できるよう日々努めている。

外科領域は、1998年11月に新たに外科医の平松 聡先生を常勤医として確保することができ、診療の幅が広がった。さらに、2006年にはパートの血管外科医によるいわゆるシャント手術を当院で実施できるようになった点は、透析患者にとって長年の願いを果たすことができるようになり大きな力づけとなった。このシャント（アクセス）手術は、後に櫻間教文医師に引き継がれ、さらに大きく発展し、ダイアライシス・アクセスセンター誕生となったのである。特に、このセンター設立により、岡山県下一円よりアクセス狭窄・閉塞等を来した患者さんたちに福音をもたらしたといっても過言ではなかろう。シャント狭窄に対する緊急治療に昼夜を問わず対応している点は患者さんたちへ大きな安心を与えていることであろう。それに加え、病院の収益面でも多大の貢献を果たしている点は見逃せない。

ダイアライシスアクセスセンター

外科医の赴任は、岡山大学消化器外科との病病連携が可能となり、術後ないしは術前の食道癌を主とする疾患への対応がスムーズに行えるようになり、癌患者の入院には、緩和医療を含む、幅広い医療・看護技術が求められるようになってきている。

小児科領域は、開院から1年遅れて小児科がオープンしたが、小児科医は1人で週一回の外来であり患者数は10人以下のごく少数のみであった。1989年4月よりは2人体制となり入院患者の受入れも可能となった。しかし、病院の立地条件から患者数の増加を図るには、病診連携と休日・時間外診療を実践することが急性期疾患を主とする小児科では、特に必須のものと考えられており、1995年10月大島圭介先生の赴任を契機に実現できるようになった。先生の休日・昼夜を問わない診療姿勢により近隣の診療所からの紹介が増え本格的に小児科の病診連携の芽が育ち始めたのである。その後は、1998年6月小川 誠医師に引き継がれ、安定して地域医療の一助としての位置づけを築くことができたのである。2010年には過去最高の年間750人の新規入院患者数に発展した。しかし、その後は一進一退で少子化ならびに予防注射の普及もあって患者数の増加は難しく減少傾向となっている。

一方、疾病構造の変遷の中で、新たな医療分野への取り組みとしては、当時、社会的に注目されつつあった発達障害児に対する診療を開始したことがその一つにあげられる。これには、実際に治療・訓練に当たる療育士の確保が何よりも大切であるが、初代の療育士として赴任した安田 寿・洋子夫妻の功績が大きい。詳細は、別項で今村昌司医師が解説しているが、現在、岡山県では旭川児童院に次ぐ数の子どもたちが療育のため通院している。このような医療内容は、弱者と目される人たちに光を当てるという初代重井理事長の理念に沿うものと思われる。小児科医は虫明亨祐医師も加わって、3人体制で多数の外来療育患者と入院患者へ対応している。

中国の格言に、「10年偉大なり、20年おそるべし、30年にして歴史になる」という教えがあるが、正に研究所附属病院の今日までの40年間の歩みを示しているように思われ、次の10年にはさらなる新たな歴史を築きあげることを念じている。

催し物案内

重井薬用植物園

植物園を楽しむ会
「百足る花で暑気払いを楽しむ」
日時：７月23日（木・祝）18：00～20：00
会場：重井薬用植物園

EAP相談室コラム

「デジタルデトックスをしてみませんか」

ジャパン EAP システムズ EAP 相談室

総務省（平成 28 年通信利用動向調査）の調べではインターネットの普及率は８割を超えています。仕事やプライベートでインターネットは私たちの生活に欠かせないものとなりましたが、ネット使用による様々な弊害の指摘もされています。

スマホや PC、タブレットが発するブルーライトは、睡眠ホルモンのメラトニン分泌を抑制し、体内時計を狂わせてしまいます。その結果、寝不足になると成長ホルモンによる体の修復や、抗ストレスホルモンの減少、食欲増進ホルモンの分泌等、体に様々な悪影響を与えます。実際仙台市教育委員会「学習意欲の科学的研究に関するプロジェクト」で 2013 年に実施された調査で「携帯やスマホを長時間使用していると、いくら勉強をしても成績が下がる」という結果が示されています。またテレビや電子ゲームを長時間利用すると、思考や創造性、情報処理、記憶を司る脳の中枢機能「前頭前野」の血流が下がり、活動が低下すると明らかになっており、スマホも同様だと考えられています。

生活を便利にする「道具」であるスマホや PC は、使い方次第では、毒にも薬にもなります。そこで、心身を健康に保ちながら上手に活用していくために、デジタルデトックスをしてみませんか。デジタルデトックスとは、意図的にデジタル機器に接続しない時間を作る行為で、近年、アメリカから広まっています。スマホ使用ゼロの生活は難しいことですが、たとえば、以下の工夫は試してみる価値がありそうです。

①スマホや PC の使用時間を記録し、視覚化する
②就寝の２時間前はスマホや PC の電源をオフにする
③朝、スマホを目覚まし時計の替わりにしない
④メールの確認は１日２回だけにし、通知機能をオフにする
⑤週末は、スマホを置いて外出する

心や頭が休まらないと感じる方は、デジタルデトックスを試してみてはいかがでしょうか。

参考文献：伊藤崇，2014,「デジタルデトックス！パソコン、スマートフォン、タブレットを “できるだけ使わない技術”」，BookOutliner
横田晋務・川島隆太，2016,「２時間の学習効果が消える！やってはいけない脳の習慣」，青春出版社　他

※医療法人創和会は職員の心の相談窓口として、ジャパン EAP システムズと契約しています。相談はお気軽に、電話やメールで。

編集後記

●例年の６月であれば、天領祭りの練習の真っただ中です。しかし、今年は新型コロナウイルス拡大のため、天領祭りの中止が発表されました。実行委員になって９年目。昨年優勝し、さらにやる気に満ち溢れていたところであったため、とても残念です。毎年この時期になると、実行委員をはじめ多くの職員が暑い中練習に励みます。準備には時間がかかり大変なことが多いですが、皆で暑さとしんどさを乗り越えた本番は、何よりも爽快です。この自粛期間を乗り越え、来年もまた皆で参加できることを楽しみにしています。（AS）

●今年度初めてはぁもにぃ編集委員を担当します。皆さんが読みたくなるような話題を盛り込めるようお手伝いしていけたらと思います。よろしくお願いいたします。新年度早々の長期休みが明けて、やっと学校が始まった小学４年生の娘が、毎日楽しそうに出来事を教えてくれます。先日は「今日学校で朝顔と“へまち”を植えたんだよ!!」と教えてくれました。仕事から帰った夫にも「“へまち”を植えた!!」と・・・・夫が「“へちま”だよ」って教えても信じない娘。「先生が“へまち”って言ってたと思う」だそうです。そういえば小さな頃にも“おすくり”“あすむーり”“とうもころし”“エベレーター”など色々と言い間違えてたな～と懐かしく思い出しました。面白く育ってる。子育てって大変なこともたくさんあるけど、面白いな、と思った出来事でした。（ＩＹ）

医療法人 創和会
生きることの尊さと健康であることの幸せを、すべての人と共に

インスタグラム
はじめました！
new

しげい病院
〒710-0051 倉敷市幸町2-30
TEL086(422)3655 FAX086(421)1991

重井医学研究所附属病院
〒701-0202 岡山市南区山田2117
TEL086(282)5311 FAX086(282)5345

重井医学研究所
〒701-0202 岡山市南区山田2117
TEL086(282)3113 FAX086(282)3115

岡山しげい訪問看護ステーション
岡山しげい居宅介護支援事業所
〒701-0202 岡山市南区山田2117
TEL086(282)4300 FAX086(282)4301

倉敷しげい訪問看護ステーション
倉敷しげい居宅介護支援事業所
〒710-0051 倉敷市幸町2-30
TEL086(422)8111 FAX086(421)1991

重井薬用植物園
〒710-0007 倉敷市浅原20
TEL086(423)2396

倉敷昆虫館
〒710-0051 倉敷市幸町2-30
TEL086(422)8207